

在宅理学療法は単独で行うものであるが故に、担当した理学療法士の力が露呈し、それを補うものは何もありません。これからは急性期や回復期と同等、あるいはそれ以上の専門的な知識・技術をもって取り組まなければなりません。これからの時代、在宅は理学療法の真価を問われる重要な関門となります。

この特集では、ある意味では最前線とも言える在宅理学療法を幅広い視点から捉え、より専門的な領域とするため、今後の医療・介護制度の方向性、在宅における理学療法をとりまく環境や事情、そして、様々な側面からの在宅理学療法の具体的な取り組みの要点について述べていただきます。

■在宅医療の現状と課題（松田晋哉論文）

平成 18 年度の医療制度改革以降、わが国では在宅医療推進のための施策が強化されている。在宅医療支援診療所制度の導入など経済的インセンティブも導入されているが、整備状況は順調ではない。理由のひとつとして、今後発展が期待される在宅医療の内容が、現在入院医療で行われているような 24 時間対応のものであるという構造的な問題が挙げられる。在宅医療推進のためには、医療法をはじめとする関連諸制度の広範な見直しを必要とする。

■在宅理学療法に求められる資質（渡邊好孝論文）

医療・介護保険制度の度重なる改正によって在宅療養生活者は増加している。在宅における理学療法士の仕事としては、優れた理学療法の技術提供のみならず、理学療法士と利用者を取り巻く関係者との円滑な連携のもと、利用者本位の在宅生活価値を絶え間なく提供することが必要だ。理学療法士が増加し、サービスの多様化と質が問われる現在、社会から必要不可欠な人材として選ばれ続けるためには何が必要かを概説する。

■在宅理学療法の実践

1. 効果的な在宅理学療法のプランニング（阿部 勉、他論文）

在宅理学療法では、起居動作と身体機能との関係性を踏まえながら、時にはメジャー（長さ）とストップウォッチ（時間）を駆使して身体機能を評価し、効果的で安全性の高い起居動作の実現へ導いていく責務がある。同時に、家族らの心理的、身体的な状況を踏まえながら、多職種協同のアプローチを念頭に置き、対象者および家族が安心・安全に暮らせる最適な方向へ導く効果的なプランニングを展開していく。

2. 寝たきり患者の全身管理の知識（長野雅江、他論文）

在宅理学療法において、医療従事者である理学療法士が身体機能のみに囚われていては患者の重大な変化を見逃しかねず、全身管理は必須の知識である。本稿では、寝たきり状態にある患者について、介護力の評価をはじめ、栄養・嚥下・肺炎・褥創など全身状態の管理やリスク管理についても解説しながら在宅理学療法のあり方について述べる。

3. 訪問理学療法のポイント（吉田俊之論文）

本稿では、在宅ならではの視点から生活機能評価、評価のあり方、環境整備をしていくうえでの留意点、活動レベルを利用したプログラムの例示、そして利用者と信頼を構築する重要性和その本質を論述した。また在宅では他職種との連携が不可欠であるが、理学療法士の着想と理学療法士が望ましく感じる生活像を、他職種に率先して伝えることで、より有効な情報共有に繋がることを説いた。

■高齢者に対する効果的な介護予防について―地域生活のひろがりに着目した介護予防評価（二瓶健司論文）

地域に暮らす高齢者は様々な原因やわずかなきっかけから要介護状態に陥る可能性が高く、要支援高齢者の場合はさらに深刻となっている。疾患や障害が原因となるだけではなく活動性の低下や心理・社会問題が原因となることも多い。今回は、それらを包括的に評価できる“地域生活のひろがり”に着目した介護予防評価（elderly status assessment set：E-SAS）の実践例も含め、効果的な介護予防について報告する。